

2020年度秋学期授業評価アンケート集計結果について

2021年5月10日

<設問別>

※問いは大きく四つのカテゴリー、< A：履修者の自己評価>/< B：シラバスについて>/< C：担当者と授業について>/< D：授業の成果について>に分けられ、全部で10の問いがある。これに加えて、問11として< E：授業外学修時間>について尋ね、最後に、授業改善に向けた自由記述が出来るようになっている。この結果をもとに、科目担当者はシラバスの振り返り項目にレスポンスを記入することになっている。

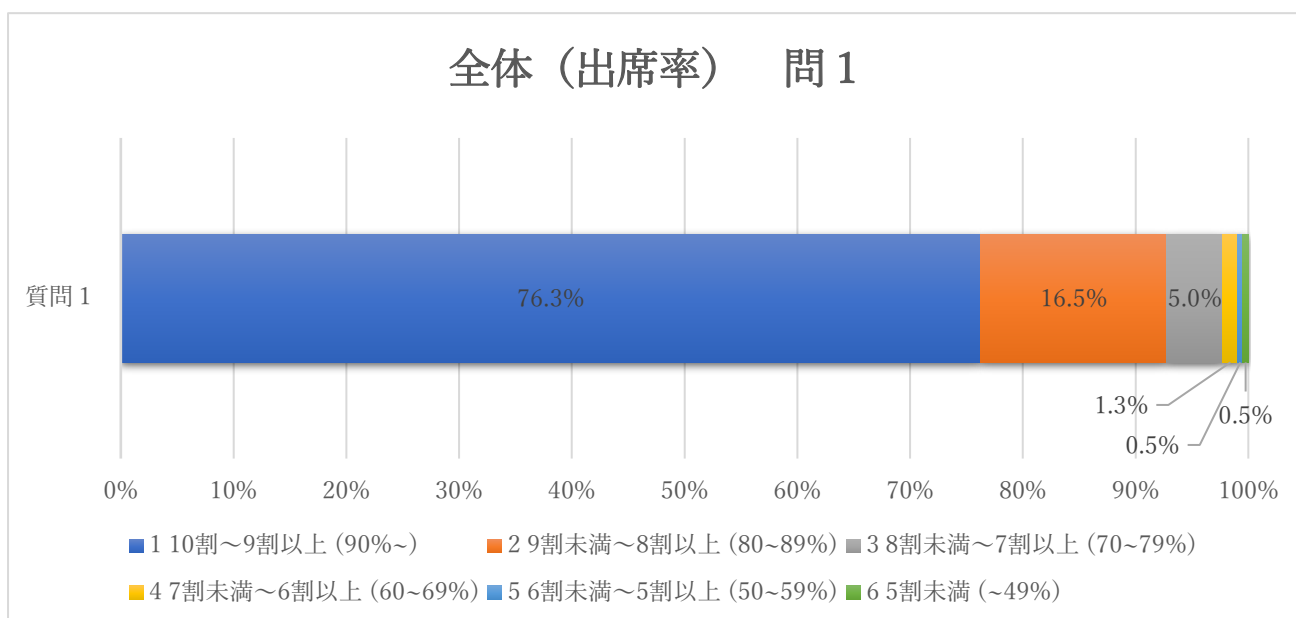
設問区分	設問	
A	問1	どのくらいの割合でこの授業に出席しましたか。 ※該当するものにマーク①10割～9割以上(90%～)、②9割未満～8割以上(80～89%)、③8割未満～7割以上(70～79%)、④7割未満～6割以上(60～69%)、⑤6割未満～5割以上(50～59%)、⑥5割未満(~49%)
	問2	私は、自主的かつ意欲的に取り組んで、この授業を受けた。
	問3	あなたの授業中のマナー(私語・携帯電話・遅刻等)は良かったですか。
B	問4	私は、この授業を履修する際、何を学習するかを理解するために、シラバスを読んだ。
	問5	担当者は、シラバスで授業の目標や計画、授業の評価方法を適切に示していた。
C	問6	授業は担当者の教え方(説明の仕方や話し方)は適切だった。
	問7	授業の内容はわかりやすかった。
	問8	授業の進度は適切だった。
	問9	授業担当者は、学生が質問や相談をしやすい環境・雰囲気作りを行い、適切な助言を与えたり質問に答えたりしてくれた。
D	問10	総合的にみて、この授業は私にとって有益だった。
E	問11	この授業の授業時間外の学習時間(授業1回ごとの平均) ※該当するものにマーク①4時間以上、②3～4時間、③2～3時間、④1～2時間、⑤30分～1時間、⑥30分未満

※問いに対する回答（1～11）は、以下の選択肢から選ぶように求められた。（問1と問11は質問票の通り）

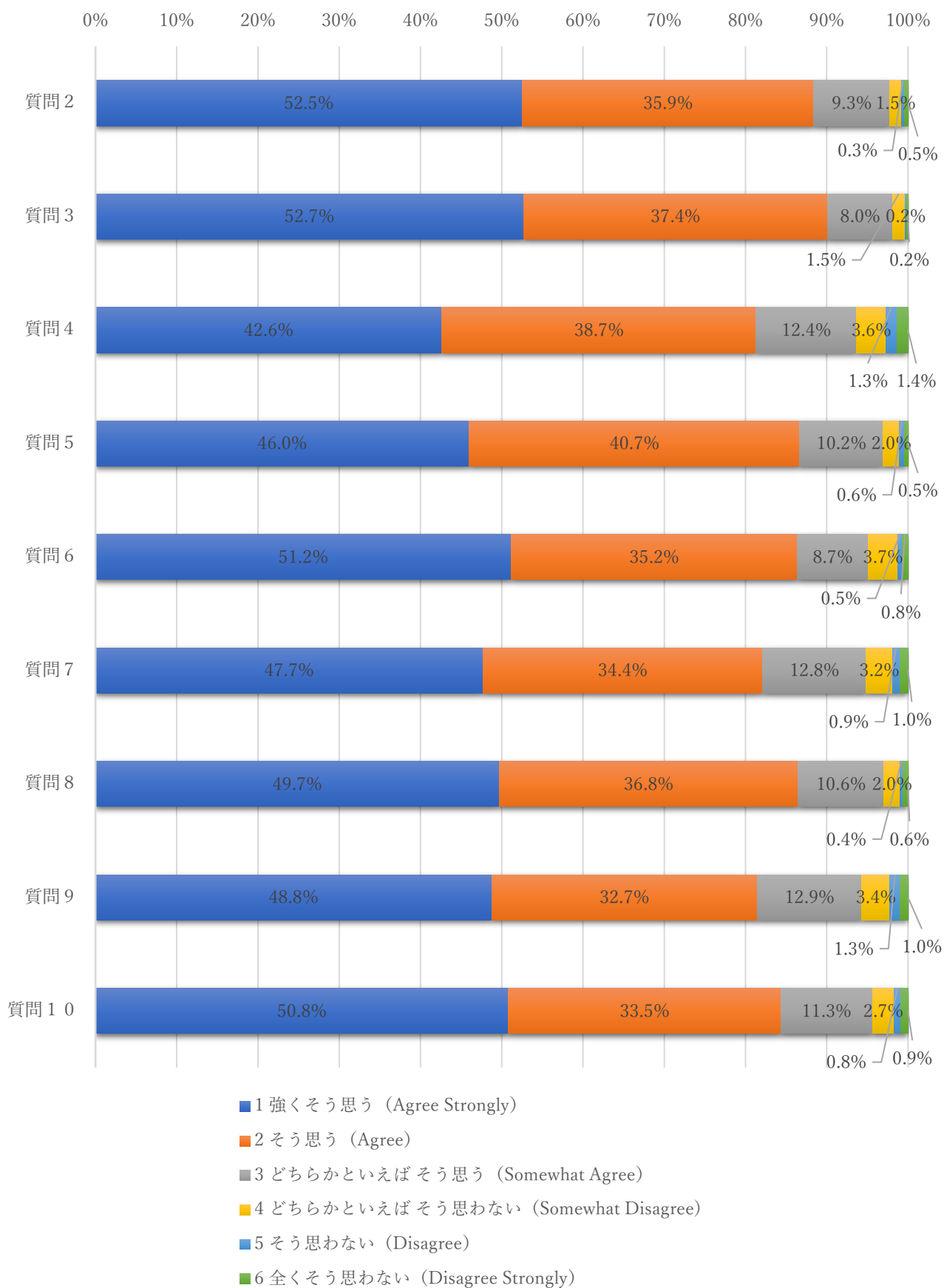
回答内容	マークシートの記入番号
強くそう思う	①
そう思う	②
どちらかといえばそう思う	③
どちらかといえばそう思わない	④
そう思わない	⑤
全くそう思わない	⑥

<教育課程全体について>

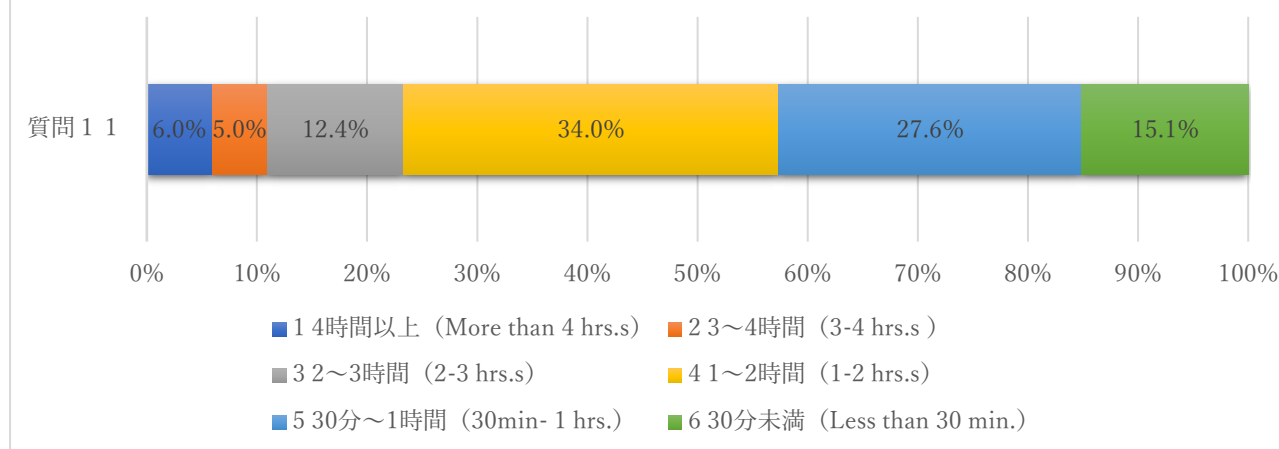
科目登録人数（7299人）のおよそ60.3%（4404人）から有効回答（昨年度同期48.5%）を得た。教育課程全体として、ここ数年来特に変化なく①「強くそう思う」から③「どちらかといえばそう思う」の肯定的評価を受けており、春学期に比べると、すべての問において9割以上のプラス評価を受けたといえる。



全体（問2～問10）



授業外学修時間



設問区分ごとのコメント

A. 受講者自身の自己評価について

問1では97.8%の学生が①～③（7割以上は出席）と回答している。また、問2と問3は④～⑥の消極的
回答は春学期の約3%よりも若干減って約2%にとどまり、授業科目を意欲的に受けたと自己評価する
学生が9割以上である（問2：96.4%、問3：97.8%）。ここ数年来、ほぼ同じ結果であることから、意
欲を持って授業にのぞんでいる学生がほとんどだと言えよう。

B. シラバスについて

問4の④～⑥の消極的
回答は6.3%で、春学期よりも下がり
てはいるが、依然として科目選
択の際にシラバスに目を通してい
ない学生が1割以下ではあるが存
在しており、授業の達成目標と自
己の関心とのミスマッチなどを避
ける上でも、読むことの重要性を
引き続き説きたい。教員側のシラ
バスの提示内容（問5）につい
ては、96.9%が肯定的評価とな
っており、シラバス作成が定着し
てきたことがあらわれている。

C. 担当者と授業について

問6～問9の項目では、春学期と同様に①～③の肯定的評価がいずれも9割を越えており、教育課程
全体としておおむねプラスの授業評価を受けていると言える結果となった。中でも、問8の「授業の進
度の適切さ」に関して、特に肯定的評価が高かった（97.1%）。

D. 授業の成果について

問10で授業が有益でなかったと回答をした（④～⑥）学生が4.4%（春学期は7.3%、昨年度は3.6%）
存在する。しかしながら、95.6%（昨年度は96%）の学生が肯定的に評価したと受け止め、教育課程全
体の授業成果について積極的に評価しておきたい。

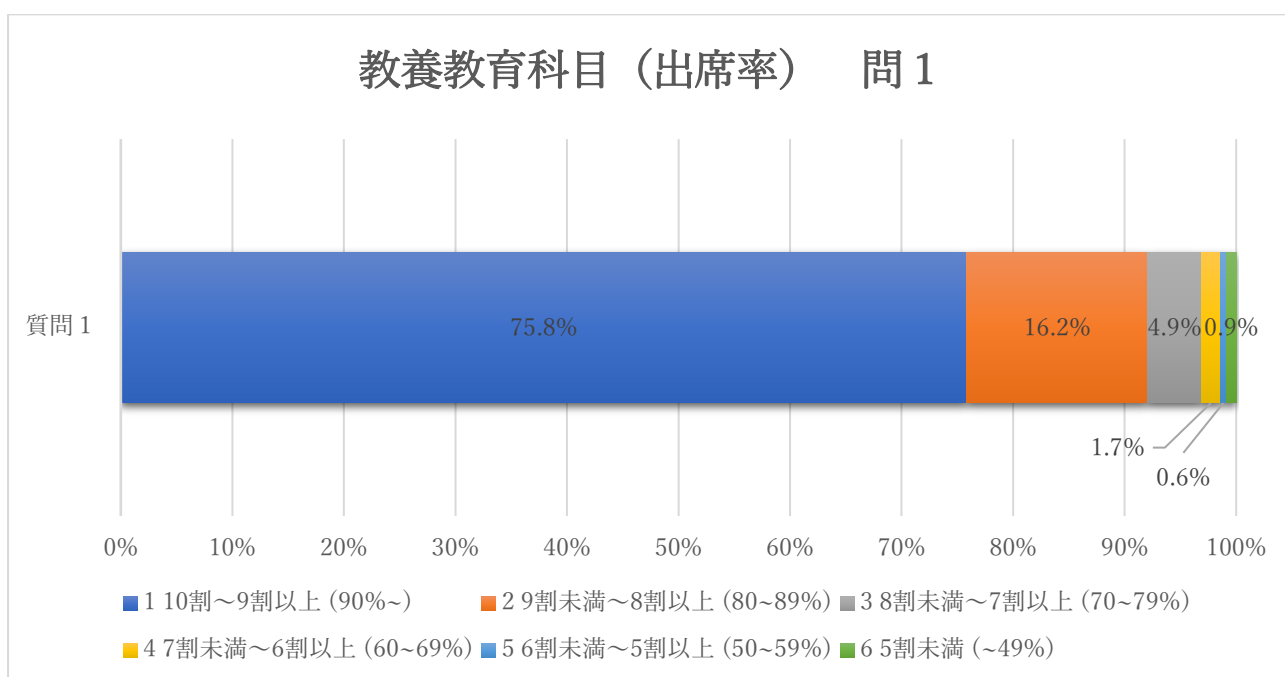
E. 授業外学修時間について

1単位科目（45時間の学修時間必要）では週1回の授業に対し授業外学修時間として1時間必要と
され、2単位科目（90時間の学修時間必要）では週1回の授業に対し授業外学修時間として4時間が必要
とされている。本学の教育課程上、1単位設定の語学教育科目が多いとはいえ、④（1～2時間）～
⑥（30分未満）が昨年度（74%）よりやや多く、春学期（76%）とほぼ同じ76.7%を占めていること

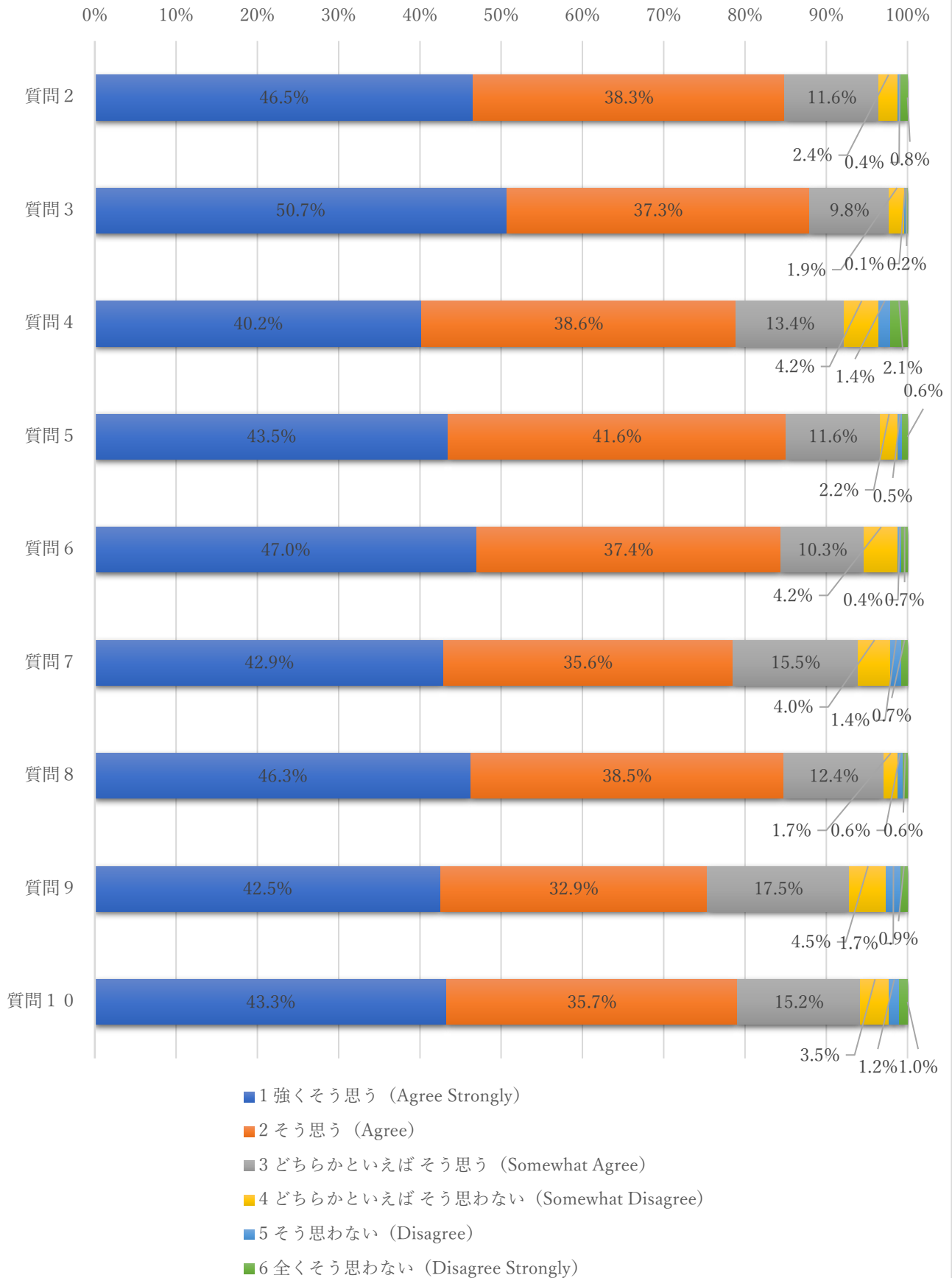
は由々しき状況であるといわざるを得ず、圧倒的に学修時間不足であることを示している。授業外学修で何をすべきかを指示するのみでなく、これを点検・評価する科目設計の実質化が必要である。

<教養教育科目について>

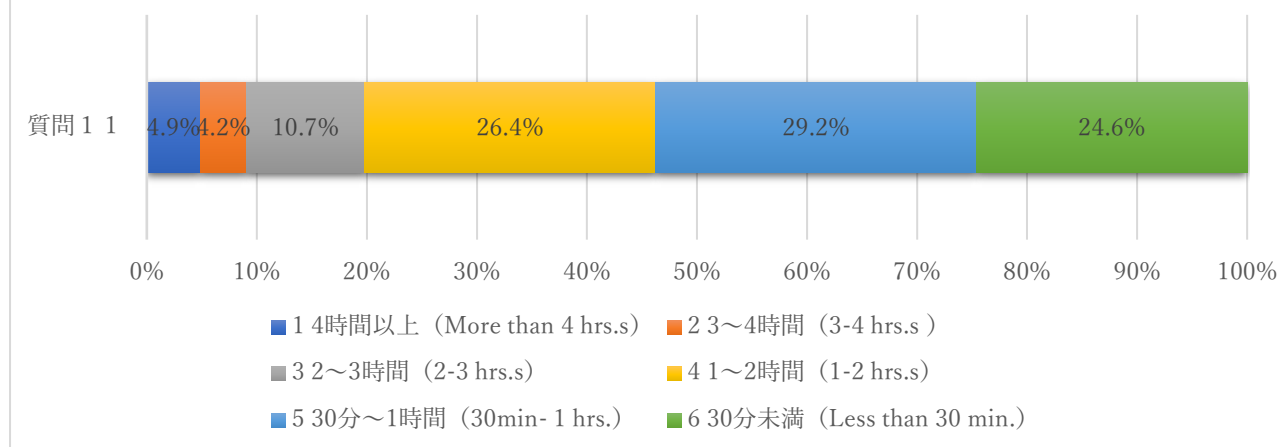
教養教育課程の全体的な傾向としては、おおむね学部教育課程全体の平均に近いが、やや低い結果（科目毎では、全体科目の傾向を上回っている科目もあれば逆もあるが）となっている。これは過去においてとほぼ同様であり、大きな変動はみられない。ただ、2020年度春学期と比すと、秋学期の結果は、全体として肯定的評価割合は若干高くなっている。



教養教育科目（問2～問10）



授業外学修時間



設問区分ごとのコメント

A. 受講者自身の自己評価について

問2に関して、程度の差はあれ意欲的に授業を受けたと自己評価する学生が約96.4%いる。一方で、④～⑥の否定的回答が本年度は3.6%（春学期6.4%、昨年度3.2%）と前年とほぼ同じで、前学期比ではかなり減っているものの、毎年一定程度は存在する。教養教育科目の教育課程上の意義などを今一度学生に意識づける必要がある。

B. シラバスについて

問4の④～⑥（シラバスに目を通していない学生）の回答は7.7%（春学期10.6%、昨年度7.6%）である。数字が上下しながらも、教育課程全体と比すと10%前後の状態が続いていることは問題であり、科目選択のミスマッチを起こさないために、読むことの重要性を引き続き説くことが必要である。教員が提示しているシラバス自体の評価（問5）は、教育課程全体の評価と変わりなく高い（①～③合計96.7%）。

C. 担当者と授業について

問6から問9においては、9割以上からおおむね肯定的な授業評価を受けている（2020年度春よりもいずれの項目も高い評価結果）といえるが、学部全体と比して、特に問9（担当者の対応）が若干低い結果が出ている（92.9%、全体は94.4%）。大人数の科目が多く、学生の質問・相談に対応しきれていないケースがあるかもしれない。一方で、問6（教え方）、問7（授業の分かりやすさ）、問8（授業の進度）はいずれも94%を超える肯定的評価となっている。

D. 授業の成果について

問10の授業が有益ではなかったと回答をした学生が5.7%（春学期12.2%、昨年度5.3%）存在するが、おおむね教養教育科目の授業成果を肯定的に受け止めている学生が多いととらえて良いと考えられる。ただし、教養教育科目においては教育課程全体に比して一定程度消極的評価の学生が多い傾向が見られるので、あらためて教育課程上の意義などを学生に意識づける必要がある。

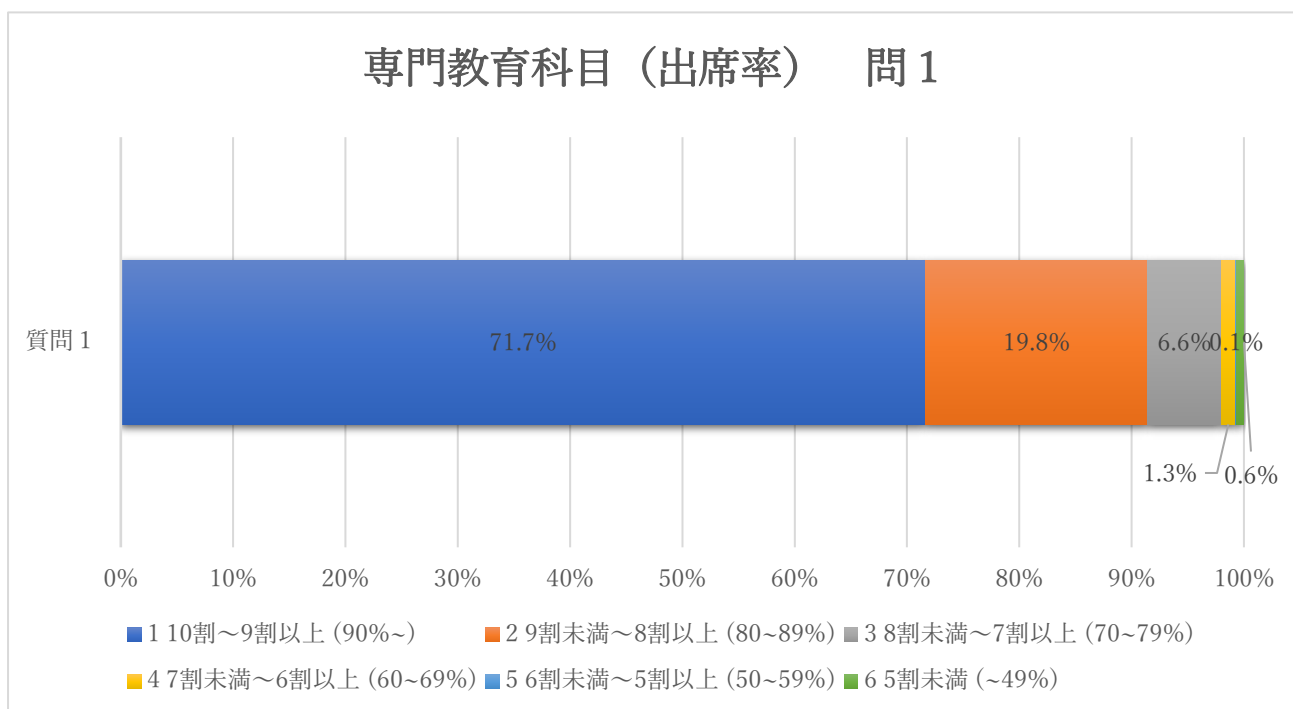
E. 授業外学修時間について

週1回の授業に際し4時間の授業外学修が必要となる2単位科目が多い教養教育科目での、4時間以

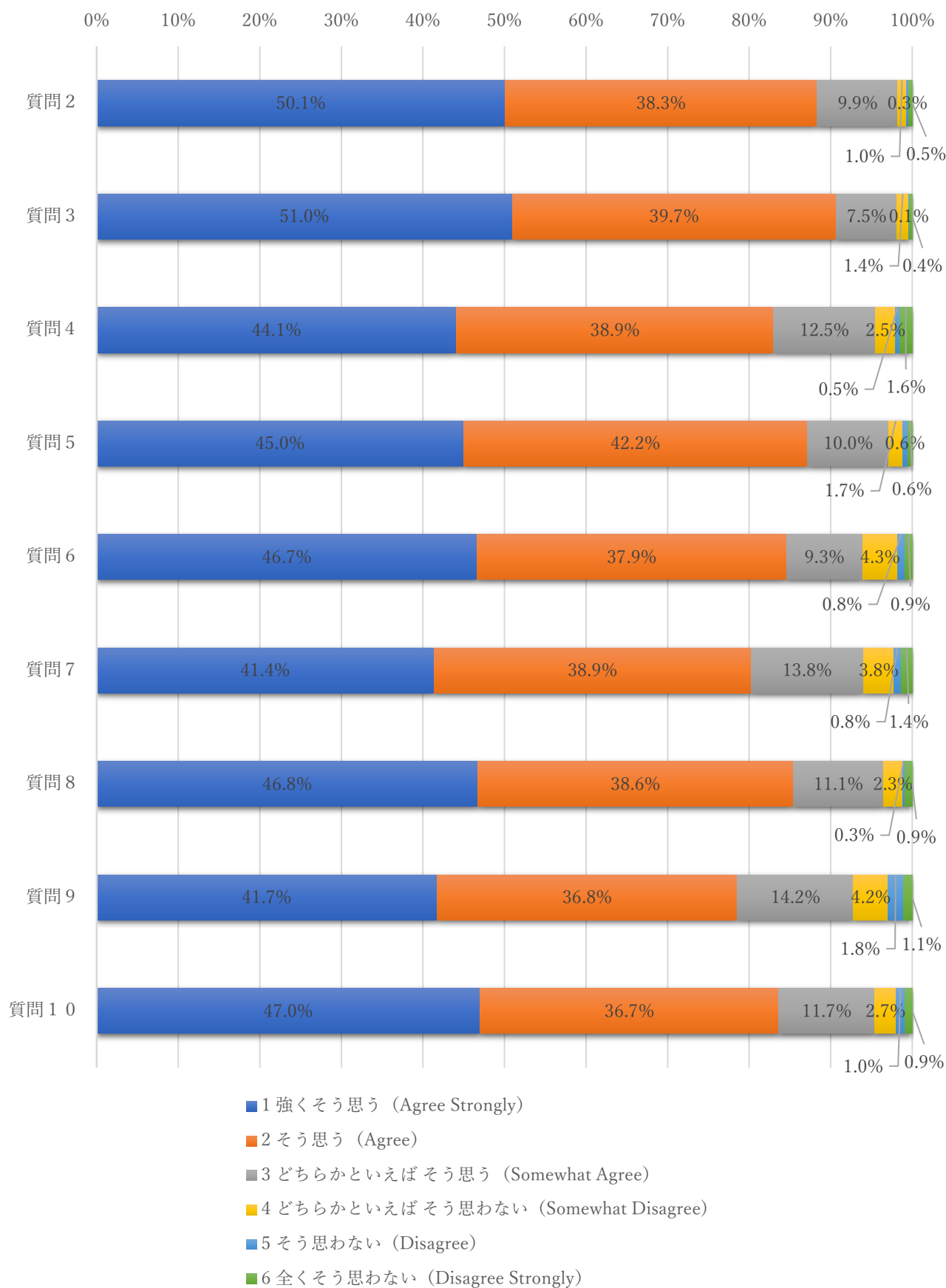
上と回答した学生は、今回の結果は4.9%（春学期4.2%、全体6%）で、やはり圧倒的に学修時間不足であることを示している。特に全体と比較して、⑥の回答者が24.6%もいること（春学期は26.2%、全体は15.1%）は問題と言わざるを得ない。本来講義科目の学修時間でこなされるべき課題が出されていないことが問題なのか、履修学生の主体的取り組みが不足しているのか難しいところだが、科目設計の実質化がますます求められるなか、少なくとも課題として、授業外学修で何をすべきかを明確に学生に指示し、かつこれを教員が確認する仕組みを作る必要があるように思われる。

< 専門教育科目について >

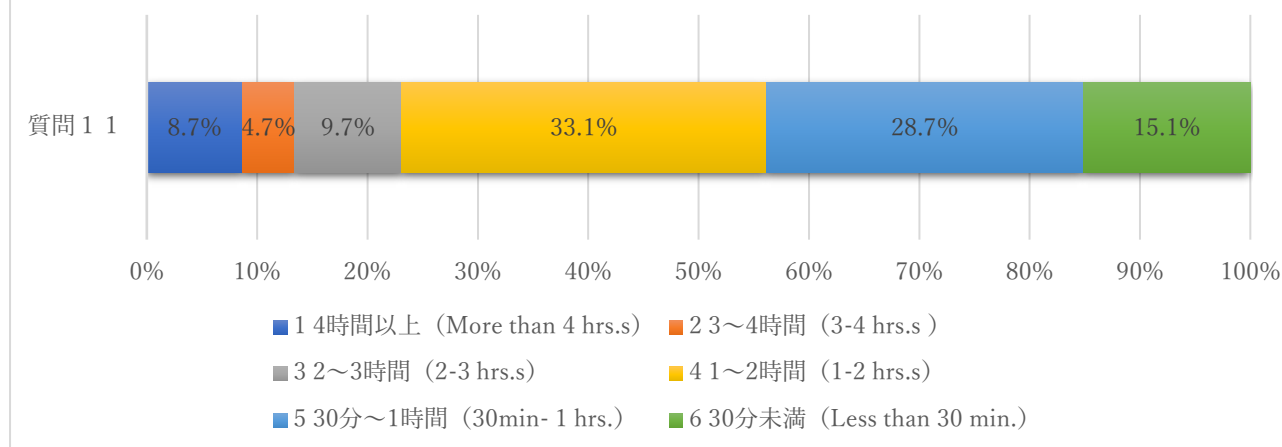
専門教育課程の全体的な傾向としては、おおむね学部教育課程全体の平均に近い結果（科目毎では、全体科目の傾向を上回っている科目もあれば逆もあるが）となっている。これは過去においてとほぼ同様であり、大きな変動はみられない。ただ、2020年度春学期と比すと、秋学期の結果は、全体として肯定的評価割合は若干高くなっている。



専門教育科目（問2～問10）



授業外学修時間



設問区分ごとのコメント

A. 受講者自身の自己評価について

問2に関して、程度の差はあれ意欲的に授業を受けたと自己評価する学生が約98.3%いる。一方で、④～⑥の否定的回答が本年度は1.8%（春学期2.4%、昨年度1.7%）と前学期比では若干減っているものの、毎年一定程度は存在する。専門教育科目の教育課程上の意義などを今一度学生に意識づける必要がある。

B. シラバスについて

問4の④～⑥（シラバスに目を通していない学生）の回答は4.6%（春学期5.5%、昨年度2.6%）である。数字が上下しながらも、教育課程全体よりも低いものの、5%前後の状態が続いていることは問題であり、科目選択のミスマッチを起こさないために、読むことの重要性を引き続き説くことが必要である。教員が提示しているシラバス自体の評価（問5）は、教育課程全体の評価と変わりなく高い（①～③合計97.2%）。

C. 担当者と授業について

問6から問9においては、9割以上からおおむね肯定的な授業評価を受けている（2020年度春よりもいずれの項目も高い評価結果）といえるが、学部全体と比して、特に問9（担当者の対応）が若干低い結果が出ている（92.7%、全体は94.4%）。教養科目と同様、専門科目でも大人数の科目が多く、学生の質問・相談に対応しきれていないケースがあるのかもしれない。一方で、問6（教え方）、問7（授業の分かりやすさ）、問8（授業の進度）は94%に近いが、それを超える肯定的評価となっている。

D. 授業の成果について

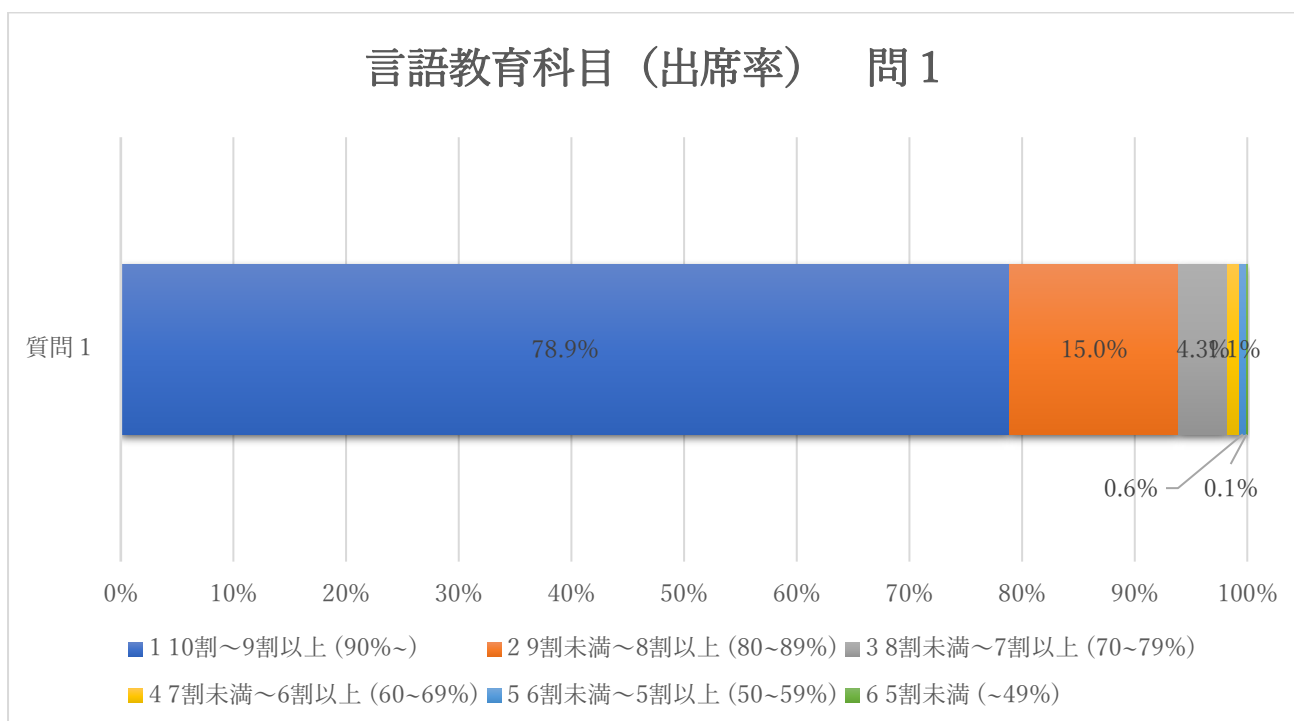
問10の授業が有益ではなかったと回答をした学生が4.6%（春学期6.3%、昨年度2.4%）存在するが、おおむね専門教育科目の授業成果をかなり肯定的に受け止めている学生が多いととらえて良いと考えられる。ただし、毎学期一定程度消極的評価の学生が見られるので、あらためて専門教育科目の教育課程上の意義などを学生に意識づける必要がある。

E. 授業外学修時間について

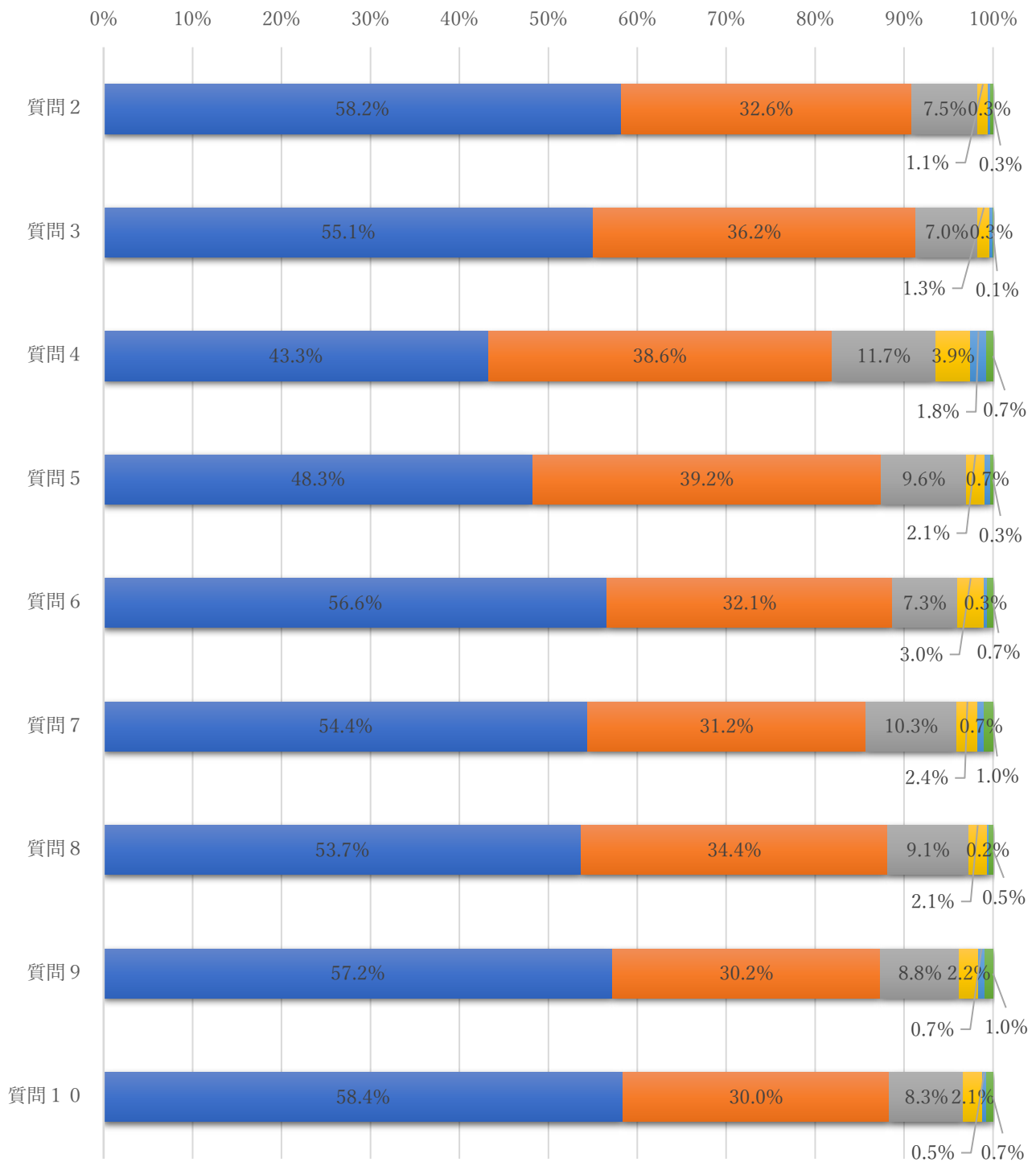
週1回の授業に際し4時間の授業外学修が必要となる2単位科目が多い専門教育科目での、4時間以上と回答した学生は、今回の結果は8.7%（春学期7.9%、全体6%）で、やはり圧倒的に学修時間不足であることを示している。特に全体と比較して、⑥の回答者が15.1%もいること（春学期は15.4%、全体は15.1%）は問題と言わざるを得ない。本来講義科目の学修時間でこなされるべき課題が出されていないことが問題なのか、履修学生の主体的取り組みが不足しているのか難しいところだが、科目設計の実質化がますます求められるなか、少なくとも課題として、授業外学修で何をすべきかを明確に学生に指示し、かつこれを教員が確認する仕組みを作る必要があるように思われる。

<言語教育科目について>

言語教育課程としての全体的な傾向としては、おおむね学部教育課程全体の平均に近い結果（科目毎では、全体科目の傾向を上回っている科目もあれば逆もあるが）となっている。これは過去においてとほぼ同様であり、大きな変動はみられない。ただ、2020年度春学期と比すと、秋学期の結果は、全体として肯定的評価割合が若干高くなっている。

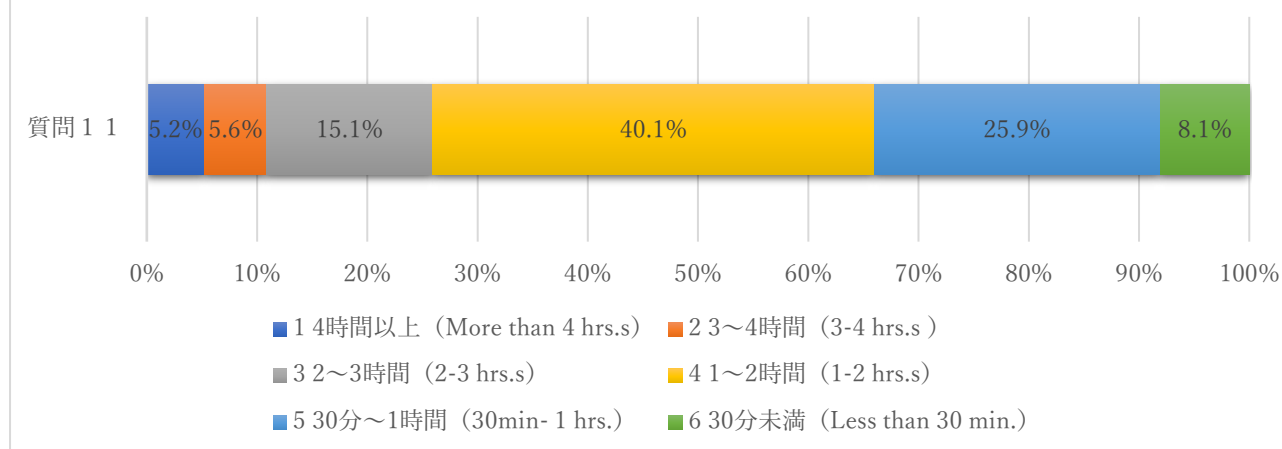


言語教育科目（問2～問10）



- 1 強く思う (Agree Strongly)
- 2 そう思う (Agree)
- 3 どちらかといえば思う (Somewhat Agree)
- 4 どちらかといえば思わない (Somewhat Disagree)
- 5 そう思わない (Disagree)
- 6 全く思わない (Disagree Strongly)

授業外学修時間



設問区分ごとのコメント

A. 受講者自身の自己評価について

問2に関して、程度の差はあれ意欲的に授業を受けたと自己評価する学生が約98.3%いる。一方で、④～⑥の否定的回答が本年度は1.7%（春学期1.7%、昨年度3.3%）と前年比では若干減っているものの、毎年一定程度は存在する。言語教育科目の教育課程上の意義などを今一度学生に意識づける必要がある。

B. シラバスについて

問4の④～⑥（シラバスに目を通していない学生）の回答は6.4%（春学期7.3%、昨年度7.3%）である。数字が上下しながらも、教育課程全体とほぼ同じ7%前後の状態が続いていることは問題であり、科目選択のミスマッチを起こさないために、読むことの重要性を引き続き説くことが必要である。教員が提示しているシラバス自体の評価（問5）は、教育課程全体の評価と変わりなく高い（①～③合計97.1%）。

C. 担当者と授業について

問6から問9においては、9割以上からおおむね肯定的な授業評価を受けている（2020年度春よりもいずれの項目も高い評価結果）といえるが、学部全体と比して、特に問9（担当者の対応）が若干高い結果が出ている（96.2%、全体は94.4%）。言語教育課程では少人数の科目が多く、学生の質問・相談に対応しやすいという要因があるのかもしれない。問6（教え方）、問7（授業の分かりやすさ）、問8（授業の進度）は96%に近いか、それを超える肯定的評価となっている。

D. 授業の成果について

問10の授業が有益ではなかったと回答をした学生が3.3%（春学期5.2%、昨年度2.9%）存在するが、おおむね言語教育科目の授業成果を肯定的に受け止めている学生が多いととらえて良いと考えられる。ただし、毎学期一定程度消極的評価の学生が見られるので、あらためて言語教育科目の教育課程上の意義などを学生に意識づける必要がある。

E. 授業外学修時間について

言語教育科目の場合、週1回の授業1単位当りで授業外学修1時間となっているが、1時間未満の学

生は本年度34%、昨年度37.9%で、やはり学修時間不足であることを示している。特に全体と比較して、⑥（30分未満）の回答者が8.1%もいること（昨年度は11.2%）は問題と言わざるを得ず（授業に出席するだけになっている）、教養教育科目や専門教育科目と同様、授業外学修で何をすべきかを指示するのみでなく、これを点検・評価する授業科目設計の実質化が確実に求められることになる。もちろん、繰り返しになるが、学生たちの授業外学修時間を担保する教育課程全体における科目配置も同時に検討されなければならない。

（文責：2020年度教育支援部長 小鳥居）